

輝く古代の宝石工場

堂床遺跡（松江市玉湯町）、調査年：1997（平成9）年

是田 敦

松江市玉湯町にある堂床遺跡は今から 26 年前に採用一年目の私が初めて調査を任された遺跡です。6 世紀～7 世紀にかけての集落遺跡で、瑪瑙（めのう）や碧玉（へきぎよく）を産出する花仙山（かせんざん）（『出雲国風土記』には「玉作山」と記載）のお膝元に位置します。調査面積は 8,000 m²にも及びますが、調査期間は 8 ヶ月程度と限られていました。そのため通常は 20 名程度で行う発掘調査を、多いときには 100 名以上もの人員で行いました。発掘調査では遺構ごとに 3～5 名程度の班に分かれて作業を行うのですが、あちらこちらで作業をする班に作業内容を指示するために遺跡中を飛び回る日々でした。今ではとてもできません。更に調査面積の広さ以上に頭を悩ませたのは堂床遺跡が玉作工房を伴う玉作遺跡であったことです。玉作工房の床には玉を作る時に生じる瑪瑙・碧玉・水晶・滑石（かつせき）といった玉の材料の破片が一面に散らばっています。玉作工房の調査では、おびただしい量の破片を種類や出土地点ごとに記録します。玉作工房の発掘調査には大変な労力が必要なのですが、堂床遺跡にはその玉作工房が 27 棟もありました。遺跡内の建物は全部で 58 棟でしたから、約半分が玉作工房だったわけです。当時、史跡出雲玉作跡を除くと県内で発掘調査された玉作遺跡の大半は玉作工房の数が 1～2 棟で、多いものでも 5～7 棟でした。



古代の玉作工場、堂床遺跡

なぜ堂床遺跡には、これほど多くの玉作工房があったのでしょうか？それは堂床遺跡で玉作が行われた時期が深く関係します。堂床遺跡は6世前半～7世紀前半にかけて玉作を行った遺跡です。この時期は畿内と出雲の玉の生産体制が一転する時期にあたります。5世紀にヤマト政権は全国に玉を供給する拠点として畿内に整備して大規模な玉作を行いました。しかし、6世紀になると畿内での玉作は停止してしまいます。それを受けて出雲は全国への玉の供給を担うようになります。私は、この状況に対応すべく花仙山の麓に出雲各地の工人を集めて玉作工場ともいえる堂床遺跡が整備されたと考えています。堂床遺跡が玉作を行っていた6世紀～7世紀は出雲が全国に玉の供給地として活躍していた時代でした。やがて玉の需要が減った7世紀後半になると堂床遺跡は役目を終えて姿を消します。玉作工房の床に散乱していた水晶や瑪瑙や碧玉や滑石の破片は、古墳などから出土する勾玉や管玉や切子玉などのように美しいものではありませんが、古代出雲の輝きを証明する逸品といえます。

(島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員)



堂床遺跡から出土した瑪瑙（左上）、碧玉（右上）、水晶（左下）、滑石（右下）の破片